国語科学習指導案

指導者　○○　○○　印

一　日　時　平成○○年○月○○日（○曜日）　第○時限（五十分）
二　学　級　一年○組（男子○○名、女子○○名）
三　単元・教材　随筆『徒然草』
四　単元の目標
（一）自然や社会と人間とのかかわりを批判的な目でとらえる作者のものの見方・考え方を理解させる。
（二）登場人物の心情を場面を通して理解し、作者の主張をとらえさせる。
（三）読解のために必要な文語のきまりや語句の意味・用法を理解させる。
五　単元の評価規準
（一）表現に注目して、筆者の主張を正しくとらえている。
（二）作者の観察者としての冷静で批判的なものの見方、考え方を理解し、自分のものの見方・感じ方を広げている。
（三）読解に必要な語句の意味・文語の決まりを理解している。
六　指導計画
全四時間
（一）内容への興味を喚起する。（本時1／4）
（二）話題の運び方の巧みさを理解する。
（三）兼好が自然や人間をどのような視点で観察しているのかを理解する。
（四）当時の隠者が感じていた「無常観」についてとらえる。
七　本時の目標
（一）地域とかかわりの深い登場人物を取り上げることによって、『徒然草』への関心を高める。
（二）作者の観察者としての立場と人間に対する批判的な見方を読みとる。
八　本時の評価規準
（一）登場人物の心情を理解し、作者の主張を正しくとらえている。
（二）作者の人間に対する批判的な見方を理解している。
九　本時の指導
（三）読解に必要な語句の意味や文語の決まりを理解している。

学習段階	学習内容	学習活動	指導上の留意点と評価の実際
導入（15分）	・本時の学習内容を知る。	①本文を読んで、話題をとらえる。 ②小野道風という人物を知り、愛知県に縁のある人だと知る。 ③『源氏物語』、『梅園叢書』の引用部分を読み、当時道風が能書家として高名であったことを知る。	①本文を音読させる。 ②小野道風という人物について、知っていることを確認し、「蛙に柳」の寓話を話して興味を喚起する。 ③「愛知県文学資料館」のコンテンツ内にある道風の画像を見せながら、能書家として高名であり、『源氏物語』にもその名前が載っていることを知らせる。 ④『源氏物語』引用部分文末の「いまめかし」という語に着目させ、道風筆の書物に価値があったことをとらえさせる。 ★登場人物が地域にかかわりの深いことを知り、興味を持って読もうとしていることを取組みの様子を見て評価する。（関心・意欲・態度）
展開（20分）	・本文の内容をとらえる。	①語句の意味・文語のきまりを確認し、口語訳をする。 ②「小野道風の書ける和漢朗詠集」がありえないことを把握する。	①「御相伝浮ける事」「覚束なし」等の語の意味を確認する。また、「じ」「侍り」「覚束なくこそ」の結び、「さ」の内容などの文法的な働きを理解させる。 ★読解に必要な語句の意味・文語のきまりを理解していることを発問によって評価する。（知識・理解） ②「四条大納言」が「藤原公任（九六六～一〇四一）」であり、「小野道風（八九四～九六六）」が生きた時代より後の人物であることを把握する。また、『和漢朗詠集』の成立は一〇一二年頃であることを知る。

十　ご高評	終結（15分）	・本時のまとめをする。	
		①本文に対しての感想を書く。 ②次時の予告を聞く。	③論理的な誤りを指摘されたにもかかわらず、「いよいよ秘蔵しけり」という「或者」の心情を理解する。 ④この章段を書いた筆者の意図を把握する。
		①一方的な人間批判にならないよう、「或者」の行動が自分にもあてはまらないか考えさせる。道風の能書家としての認知度は世間にも高かったことを踏まえて考えさせる。 ★本時の評価規準（二）による評価をノートの記述に基づいて行う。（知識・理解） ②本時の復習と、予習の指示をする。	③「相伝」の過ちを認めようとせず、かえって理屈を述べて、価値がある物を所有しようとする、人間の愚かさをとらえさせる。 ④観察者としての立場から、人間の愚かな姿を端的に表していることをとらえさせる。 ★筆者が持つ、人間の愚かさへの批判的な見方を正しくとらえていることを発問によって評価する。（知識・理解）

本文

徒然草　第88段　（小学館『完訳日本の古典』による）

或者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、ある人、「御相伝浮ける事には侍らじなれども、四条大納言撰ばれたる物を、道風書かん事、時代やたがひ侍らん。覚束なくこそ」を言ひければ、「さ候へばこそ、世にありがたき物には侍りけれ」とて、いよいよ秘蔵しけり。

源氏物語　歌合（小学館『完訳日本の古典』による）

まづ、物語の出で来はじめの親なる竹取の翁に宇津保の俊蔭を合はせて争ふ。「なよ竹の世々に古りにけること、をかしきふしもなけれど、かぐや姫のこの世の濁りにも穢れず、はるかに思ひのぼれる契りたかく、神世のことなめれば、あさはかなる女、目及ばぬならむかし。」と言ふ。右は、「かぐや姫のぼりけむ雲居はげに及ばぬことなれば、誰も知りがたし。この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のこととこそは見ゆめれ。ひとつ家の内は照らしけめど、ももしきのかしこき御光には並ばずなりにけり。阿部のおほしが千々の金を棄てて、火鼠の思ひ片時に消えたるもいとあへなし。車持の親王の、まことの蓬莱の深き心も知りながら、いつはりて玉の枝に瑕をつけたるをあやまちとなす。」絵は巨勢相覧、手は紀貫之書けり。紙屋紙に唐の綺を陪して、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常のよそひなり。「俊蔭は、はげしき浪風におぼほれ、知らぬ国に放たれしかど、なほさして行きける方の心ざしもかなひて、つひに他の朝廷にもわが国にもありがたき才のほどを弘め、名を残しける古き心をいふに、絵のさまも唐土と日本とをとり並べて、おもしろきことどもなほ並びなし。」と言ふ。白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり。絵は常則、手は道風なれば、いまめかしうをかしげに、目も輝くまで見ゆ。右はそのことわりなし。

梅園叢書（『梅園全集　下』による）

學に志し、藝に志す者の訓

小野道風は、本朝名譽の能書なり。わかゝりしとき、手をまなべども、進ざることをいとひ、後園に躊躇けるに、蟇の泉水のほとりの枝垂れたる柳にとびあがらんとしけれども、とゞかざりけるが、次第次第に高く飛て後には終に柳の枝にうつりけり、道風是より藝のつとむるにある事をしり、學てやまず、其名今に高くなりぬ。